

行事と地域環境の視点による幼稚園教育の再検討と
保育者養成の諸課題

川 崎 勝 彦
今 津 孝次郎

愛知東邦大学

行事と地域環境の視点による幼稚園教育の再検討と 保育者養成の諸課題

川崎 勝彦*
今津 孝次郎**

—目次—

1. 問題—見落とされがちな「行事」と「地域」—
2. 学校行事と幼稚園行事の意味と意義
3. 幼稚園行事の種類
4. 地域の諸施設訪問の事例
5. 地域環境としての幼小連携

1. 問題—見落とされがちな「行事」と「地域」—

幼稚園教育について検討する際に、実際にはきわめて重要な役割を發揮しているにもかかわらず、ともすると研究対象からは見落とされがちな諸側面がある。その諸側面としてここで注目するのは「行事」と「地域」である。それらは保育内容としては「環境」に属する課題だと言えるが、幼稚園教諭の養成教育のなかでもあまり触れられることはない。幼稚園の一般的な保育課程（カリキュラム）からすれば、毎日のクラス内または園庭での保育とは別の特別活動といった周辺的な位置づけになるからだろう。幼稚園教諭養成の教職科目では実践的な諸活動を重視はしていても、行事や地域に関する内容は脇に置かれるのが普通である。しかし、個々の幼稚園（特に私立）にとって、行事およびそれと密接に関係する地域は、それぞれの保育課程にとって極めて重要なもので、なくてはならぬ活動対象である。

「行事」とは英語では「イベント」(event)である。たとえば年中行事の一つとしての「ひな祭り」は、手近な英和辞典では「伝統的なイベント」という表現となる⁽¹⁾。

The Girls (Dolls') Festival is one of the chief traditional events of the year.

今日のわが国では「行事」という漢字表記よりも「イベント」というカタカナ表記で日常的に幅広い分野でよく用いられている。祝祭日のイベントとか、まちおこしのイベント、地域諸機関のイベントなどなど。これらの「イベント」用法に注目すると、「行事」という従来からの平凡な表現以上に、イベントの持つ特性が浮かび上がる。それらを列挙すると以下のようになる。

* 私立東貴船幼稚園長・愛知東邦大学非常勤講師

** 愛知東邦大学教育学部

- ①ルーティンに流れる日常生活のなかで、その時々には活力を湧き起こす非日常的活動。
- ②普段は来ない多様な多くの人々が集まり、普段なら見られないような賑やかな交流が生じ、非日常的な高揚感がかもし出され、日常生活にエネルギーを吹き込む。
- ③上の①と②の性質を帯びさせるために、イベントでは特別の舞台や食事などの環境設定が工夫され、参加する人々も特別の衣装や仮装をまとい、非日常的空間であることを演出する。
- ④さらに③のために、長い時間をかけて環境設定のための準備作業が多くの人々によって担われる。イベントは本番の日だけでなく、本番に向けた長い準備期間を含む一連の過程全体を構成する活動である。

以上のようなイベントの特性の観点から、幼稚園における行事と地域の重要性についても検討していくことができよう。そこで、以後の本文中では「行事」を「イベント」の表現に置き換える場合もあるが、意味は同じである。

なお、以上のような問題意識は、「平和公園のフィールドワーク」に基づく「保育内容（環境）」に関する私たち二人の共同論文⁽²⁾を作成する最終段階で副産物として生まれたものである。「環境」として真っ先に挙げられるのは「自然環境」だとしても、他に「行事」や「地域」も見落とせないという点で意見が一致した私たちは、その後も引き続き「行事」と「地域」に関して相互討論を繰り返してきた。したがって、本稿全体は前論文と同じく川崎・今津による共同執筆である。

2. 学校行事と幼稚園行事の意味と意義

行事と地域の重要性については、幼稚園だけでなく、小・中・高校の学校全体に共通する。ところが、その重要性については暗黙の前提となり、改めて意識されて議論されることは少ない。そこでまず、「学校行事」がもつ諸機能について、「時間の区切り」という観点から検討を加えながら以下の五点を整理しておこう⁽³⁾。

- ①運動会（体育祭）や作品展、学芸会などの諸行事は、年間カリキュラムの時間的な節目づくり、ないし具体的な活動内容を示す。
- ②入学式や卒業式といった特別の学校行事は、時間の質的転換をはかるとともに、学校成員の異動による学校組織の変化を体感させる儀礼の意義を帯びる。
- ③諸行事は学校組織の凝集性を高める暗黙的な手法として機能する。
- ④諸行事は学校公開と結びつき、地域から学校を理解してもらい、学校への信頼性を高める手立てとして暗黙のうちに意図されている。
- ⑤以上の四点を総合して、各学校の特徴を「学校らしさ」として地域に訴える効果を醸し出す。

「幼稚園行事」の場合も以上の五点がそのまま当てはまるとともに、それ以上に重要な側面を帯びていると言えよう。幼稚園にとって、行事は年間の保育課程全体にとって、時間的区切りの意味を帯びる節目としての要素であり、しばしば保護者と共におこなう活動となるだけに、保育内容を構成する重要な要素でもある。それだけに、こうした行事は各幼稚園、とりわけ独自性を

強調する私立幼稚園の保育の特徴を物語るとともに、保護者にもアピールしうる重要な活動となる。

そして、幼稚園行事のなかには「地域」と関わるものが多い。地域は幼稚園の限られた場を超えて、園児がそこで育つ広い「環境」として位置づけることができる。たとえば、幼稚園の近隣にある公園への遠足をはじめ、地域の安全を守る消防署や警察署の訪問、あるいは博物館といった文化施設ないしスポーツセンターなどへの見学、高齢者福祉施設でのお年寄りとの触れ合い、そしていうまでもなく多くの園児がまもなく入学する小学校見学などである。また他方では、施設訪問だけに止まらず、交通事故や幼児誘拐、いたずらなどについて、日頃から子どもの安全第一を目標とする幼稚園側としても十分に注意すべき事柄として日頃から幼稚園内でも話題にしておかねばならない必要性が高まっている。そうした時代状況である以上、園児の生活圏として幼稚園内のみならず地域全体を視野に入れるのは当然のことである。

さらに、幼稚園行事のなかには、毎年のように地域の諸機関を訪問することを通して、園児が地域社会の仕組みに触れ、幼稚園内の生活では味わえない新たな経験の機会を提供することで新たな成長を促す一助とする、という幼稚園教育の意図が含まれている場合がある。また、地域の諸機関を訪問することは、地域から（私立）幼稚園の存在を知ってもらふ絶好の機会となると同時に、諸機関にとっても園児の訪問を通して諸機関の活動を地域に広報するまたとない機会ともなる。こうして、幼稚園行事としての地域訪問は地域全体の「まちづくり」の一環としての機能を果たすというように、さらなる発展を遂げていく性質を帯びている。

こうして、行事と地域環境への視点は、変動の激しい現代社会において幼児教育を再検討する際に不可欠であり、小・中・高校の学校行事以上に、より広い視野を提供するものであると言えよう。それだけに「保育内容（環境）」の領域テキストでも、「園内外の行事とどうかかわっているか」について、環境理解のための項目として若干は触れられてはいる。たとえば、次のような3点である⁽⁴⁾。

①「七夕」を素材として、伝統的な「文化」に触れることの大切さが論じられる。②「運動会」や「卒園式」を素材として、普段の「ケ」の生活のなかに「ハレ」の日が登場することによって、生活の節目となることが述べられる。③地域のさまざまな施設訪問を通して地域の人々との交流をはかることにより、地域は「与え与えられる相互の関係性」「連帯性」が育まれる生活空間であることの学習となる。

本論はこうした点を具体的な保育実践に即しながら、さらに検討を深めることを目的とする。名古屋市内にある私立きふね幼稚園での取組みも考察の参考事例として適宜取り入れていきたい。

3. 幼稚園行事の種類

さて、幼稚園行事は大きく二つの種類に分類できよう。「1. 季節を味わう」と「2. 地域の諸施設・諸機関の訪問を通じて触れ合う」である。ここではきふね幼稚園の年間行事に沿いながら具体的に整理するが、これらは他の多くの幼稚園にもおおそ共通するような諸行事である。

そして、それら諸行事が保育計画の柱に据えられて、年間の時間的流れのなかで大きな節目としての区切りともなっている。

(1) 季節を味わう行事

小・中・高校の諸行事と比べると、幼稚園行事の最大の特徴は季節ごとの行事が大切にされていることである。そして、それらは現代の家庭で実際にはあまり見られなくなっている伝統的習俗を含んでおり、幼稚園行事は結果として四季の変化に根ざした日本文化を継承するという重要な役割を果たしている。つまり、幼稚園行事は伝統的な暮らしに近い場を提供しており、そうした機会に保育段階で触れることが、日本の文化的伝統を大事にする心を育てるという目的をうかがい知ることができよう。季節を味わい、伝統文化に触れる諸行事が子どもの成長発達にとっていかなる意義をもつのかという点は、「感性」や「環境」「歴史」「習俗」についての体感的「知識」などの観点から、さらに検討すべき興味深い課題である。そこで、季節を味わういくつかの行事を具体的に例示してみたい。

<春>暖かくなり、日差しも強くなる春は、園外へ出て、近隣の公園などに散歩や遠足に出かける行事が行われる。草花や新緑を眺め、虫たちの動きにも目を注ぐことは、自然環境に触れて感性を育てる重要な保育内容にも繋がる。

そして、季節の変化に沿って年中行事をおこなう時期を伝統的に「節句・節供」と呼び習わして独特の時間区分をおこなってきた。重要な区切りが五節句で、なかでも「上巳」（3月3日）と「端午」（5月5日）が代表的である。そこで、園内では、3月の節句である女児の成長を祈り祝う「ひな祭り」で、おひなさま人形や調度品を飾ると、人形が大好きな子どもたちは喜び楽しむ。きふね幼稚園でも大きな「ひな人形」が飾られる（写真1）。また、5月の節句では男児の成長を祈り祝う「子どもの日」にも、さまざまな行事が行われる。



写真1 ひな祭り

かつては当たり前のように家々で飾られていた「ひな人形」は、広い日本式家屋から今日では洋風のマンションスタイルが主流になっているために、祭壇そのものを所有しない家庭が増えていくし、受け継いでいる雛人形を飾る空間が無くなり、押し入れにしまい込まれたままのケースも

ある。幼稚園でひな壇飾りを見る保護者のなかには「懐かしい」とか「家に無いので初めて間近に見られます」といった感想が寄せられる。こうして、幼稚園での「ひな祭り」は春の幼稚園での単なるイベントを超えて、ひな壇を据えた春の祭りという日本の伝統文化を継承する貴重な場として今や大きな意義を帯びているのであり、生活様式の変化を念頭に置くなら、その意義は今後ますます重要になってくるであろう。

〈夏〉夏季にもさまざまな行事がある。どの幼稚園でも行われる代表的なものが「七夕」である。これも五節句の一つで、7月7日に牽牛星と織女星を祭る。別名「星祭」とも呼ばれるように、星を眺めながら宇宙に想いをよせる雄大なロマンがあるだけに、幼稚園保育では伝統行事に沿いながら、自然環境を感じる貴重な機会ともなる。伝統的には五色の短冊に歌や字を書いて、庭に立てた竹の枝葉に飾り、裁縫や字の上達を願ってきた。今では短冊にさまざまな願い事を書き記して竹の枝葉につるす作業が幼稚園でも各クラスで取り入れられている。きふね幼稚園でも出来上がった竹は玄関に立てられ、来園する保護者や通りすがりの人たちにも夏の季節を味わう飾り付けとなる（写真2）。

園児が書き込む願い事を細かく見ると、その内容に関して近年の変化が感じられる。かつては「夢」が大きく語られるような書き込みが多かった。それこそ「宇宙飛行士になりたい」とか「ウルトラマンになりたい」とか、実現可能性に拘りなく、文字通り「夢」や「空想力」豊かな願い事が一般的であった。そうした願い事は「子どもらしい」と受け止められていた。ところが今では「パティシエになりたい」とか「レゴマスターのプロになりたい」と言うように、身近で具体的な対象に絞られることが一般的な傾向である。奇想天外なことも考えるような「子どもらしさ」はどこへいったのだろうか、とつい感じてしまうのである。



写真2 七夕

身近で現実的な実現可能性ある将来を具体化するの、幼児期から児童期・青年期と年齢が上がるに従って絞られていく過程だとするなら、今の幼児は最初からすでに年齢が進んでしまっているような発想法を取っているのではないか。もちろん、子どもの願い事はその時々々の社会状況の反映という側面を持たざるをえないにしても、七夕飾りに書きこまれた内容から、「夢」や

「空想力」がいかに語られているかに注目することは興味深い。高度情報化のなかで、ありとあらゆる情報が文字だけでなく、写真や動画も含めてネット上に氾濫していて、バーチャルこそリアリティだと感じられるような時代には、すべてが身近で具体的な形として接するようになり、自由に空想や想像を巡らせる余地が少なくなっているのかもしれない。それだけに、七夕飾りを創るという作業だけでなく、書かれた内容を子ども理解の手掛かりにしつつ、改めて保育の課題を家庭と共に考えるという作業があってよい。そしてその作業も保育者養成課程での課題の一つになると考える。

一方、きふね幼稚園が数年前から7月上旬に独自におこなっている行事がある。「流しそうめん会」である（写真3）。当時の園長の発案で始まったが、目的は園児たちが「そうめん」という夏季の食感を味わうことにある。ただし、むしろそれ以上に重要な狙いがあり、それが父親の保育参加であった。母親中心の育児と保育参加の傾向に新風を吹き込もうという狙いである。

この行事はすべて父親の準備と運営で進行する。まず事前準備として竹藪から竹を伐り出し、その竹を割って「流し台」を作り、園庭に運んで高低差をつけた台を設置し、水が流れるようにセットする。園内では、そうめんを湯がくとともに、具となる食材を細かく切って流し込む素料を準備する。そして、クラスごとに竹の台に集まった園児が食べられるように上方から食材を流し込む。これらの作業を担当するのがすべて父親有志なのである。こうして、この新たな行事は保育に父親も参加する態勢を形成する重要な契機を提供することになった。

先ほど「学校行事」の機能として「③諸行事は学校組織の凝集性を高める暗黙的な手法として機能する」と「④諸行事は学校公開と結びつき、地域から学校を理解してもらい、学校への信頼性を高める手立てとして暗黙のうちに意図されている」の二つを挙げた。これらがそのまま幼稚園での「流しそうめん会」の果たす役割をも示していると言えよう。



写真3 流しそうめん会

なお、「流しそうめん会」は父親有志に加えて、2016年度から愛知東邦大学教育学部生による

「サービス・ラーニング」（地域諸機関での奉仕活動を通じた経験学習）の一環として、10人ほどの学生がお手伝いに加わっている⁽⁵⁾。学生にとっては、保育現場で「幼稚園行事」の仕組みを実際に経験しながら、夏季の食感を味わう園児たちとも接して、いかなる反応を示すかをつぶさに見聞きする貴重な場面となる。かつてほど季節感を味わう習俗に触れる機会が少ない若い学生自身が、夏季の風情を満喫する場となる保育実践ともなっている。

＜秋＞小・中・高校でもよく言われるが、幼稚園でも秋は年間でもとりわけ大きな行事の季節である。運動会（最近では残暑の関係から春に移行されているケースもあるが）をはじめ、学芸会・作品展（文化祭）など、長期にわたる準備や練習に時間や労力を取る活動が目白押しだからである。文字通り「実りの秋」を学校・園なりに体現する行事となっている。しかも、それらは学校・園を開放して、保護者をはじめ地域の人々に子どもたちが日頃の成果を発表する姿を見てもらって、自らの保育・教育組織とその取組みに対する理解を広く得るための格好の機会ともなる。幼稚園（小学校でも）では、他にも近隣の公園などへの秋の遠足、栽培していたイモなどの収穫と焼きイモ会が開かれる。それこそ農作物の「実りの秋」を祝う伝統的な村の「秋祭り」が、幼稚園の小規模なお祭りのなかに受け継がれて息づいていると言ってよい。

＜冬＞冬もさまざまな行事が続く。日照時間が短く寒さもつるために、四季のなかではやや暗く寂しい感じに陥りやすいだけに、園児たちの楽しさを盛り上げるような行事が大切にされる。元はキリスト教の重要行事であるが、日本でも世俗的な色彩を帯びて年中行事としてすっかり定着しているクリスマス会があって、七夕とは違った飾り付けも興味深い。また、日本古来のおもちつきはお正月に向けて欠かせない準備の一環であるが、杵と臼による作業を園児が実際に行ってみる面白さと、作ったもちを皆で食べる楽しさが一杯である（写真4）。

そして、2月になると「節分」がある。「節分」とは「節句」と同じく、季節の区切りの意であり、立春・立夏・立秋・立冬を指すが、とりわけ立春の前日の称である（今の暦で2月3日か4日）。節分には、狂言の出し物の一つであったが、鬼に口説かれた女が鬼を騙して隠れ蓑や打出の小槌などを奪って、「鬼は外」（続いて「福は内」）と叫びながら豆をまいて追い出すという動作がつきものとなった。きふね幼稚園でも、保育者が鬼と鬼退治を演じて披露し、園児が楽しむコーナーが設けられる（写真5）。



写真4 おもちつき



写真5 節分

ここで、赤鬼にふんした園長が演じる動作が園児のなかに思わぬ反応を引き起こしたエピソードを紹介したい。これまで何回か赤鬼を演じてきた園長がその演技をさらに高めて、鬼の「怖さ」を特に強調する動きを表現したときである。怖がる園児のなかに、その怖さがあまりにも頭に焼きついてしまったのか、普通なら鬼が園長であることが分かるとともに、まもなく消えてしまう怖さの印象が、なかなか消えずに家でも怖がって「幼稚園へ行きたくない」とまで母親に訴える園児が出てきたケースである。母親からは「来年はもう少し優しい鬼を演じてほしい」との要望が寄せられた。その園児はなんとか登園するが、園長室に来ては「怖かった」と園長先生に不満を繰り返すのである。

このケースには考えるべきことが二つある。一つは「鬼の怖さ」についてである。「鬼」とは醜悪な形相と快力をもって人畜に害をもたらす想像上の妖怪である。人間世界に存在する「悪」「無慈悲」「残忍」「不吉」「致死」などに相当する現実が具現化された存在だと言えよう。したがって「鬼」と向き合うことは、まずはこの世の中にそうした現実があることを知り、そしてそれらを回避するという目標価値について節分儀式を通じて伝えるというように（「鬼はソト」）、子ども時代からの一種の道德教育ともなっている。「悪いことや間違ったことをすると鬼さんに捕まるよ」といった言い方は、ある意味で伝統的なしつけの一方策であったと考えることができる。鬼に象徴される「怖さ」の感覚について言えば、人間個人の力を超えるような諸現実とは自然現象をはじめ、生命の有限性は言うまでもなく、さまざまな悪的行為も含めて人間生活に伴っており、「怖さ」の感覚は「畏怖」の念にも広がりながら、子ども時代から経験的に身につけておく必要がある。そうでないと個人の自己中心性や全能感、欲望の肥大化を抑制することができないからである。「鬼の怖さ」が一種の道德教育であるというのもそうした趣旨である。

もう一つ注目したいのは、園児が園長に怖かったという不満を繰り返す口にしてしている点である。この園児は普段はおとなしい性格で、おそらく感じた喜怒哀楽を園内でも家族内でも自由に表わすような子どもではなかったと想像できる。それが、今回の「鬼」に出会うことをきっかけに、たしかに「怖さ」を感じ過ぎる面があったとはいえ、園長（「鬼」役）とのやりとりを通じて自己表現が解き放たれた、という捉え方もできるのではないだろうか。そしてそのことは園児の自己表現力にとって一つの大きな成長だったと考えられるのである。

(2) 日本の伝統行事と保育者養成教育の課題

以上のように、季節ごとの行事には日本古来の伝統が生きており、それが幼稚園行事に取り入れられて大切に継承されていることが分かる。それらが保育段階の子どもの成長発達にとって、とくに想像力や感性、あるいは人間関係力を育むという点で大いに意義ある取組みとして幼稚園教育で広く認められているからである。

そうすると、ここで保育者養成教育としてあまり意識されていない課題が浮かび上がる。それは日本の素朴な文化や季節ごとの伝統的行事についての基礎知識を養成校で習得しておくべきだという点である。というのも、今の若い世代は自らの生活体験として伝統行事にあまり馴染んでこなかったであろうし、伝統行事についての知識も持ち合わせていないだろうからである。そのまま幼稚園の保育者になって、すぐさま季節ごとの行事に取り組んでも、ごく表面的で形式的な実践に止まり、園児たちの豊かな感性を育むための行事として達成しにくくなるだろう。「保育内容（環境）」領域にとっては、「行事」は周知的な課題かもしれないが、日本の伝統行事については学生自身が少し調べてみるだけでもおおよその基礎知識は得られるはずである。

それに、日本社会でもグローバル化の波が押し寄せ、外国籍の（または「外国を背景にする」）子どもが入園（幼稚園よりも託児時間が長い保育園で目立つ傾向がある）するケースが増えつつある現在、日本の伝統文化を行事として扱うことは、異文化相互の交流という深く広い課題にはかならない。「多文化保育」にとっても新たに検討すべき重要な項目となってくる⁽⁶⁾。たとえば、宗教的風土や日常生活習慣を異にする国々から来日して入園した外国人園児とその保護者は、日本の伝統文化に根差す園の行事をどう受け止めるのか、そして日本の園はどのように外国人に向けて日本文化を発信して外国人に理解してもらうのか、本格的に検討すべき段階を迎えている。

(3) 地域の諸施設・諸機関を通じた触れ合い

さて、季節を味わう行事と並んで見落とせないのは、地域の諸施設・諸機関の訪問や諸活動への参加を通じて、さまざまな人々との触れ合いを深める取組みである。園内の環境だけでなく園外の広い環境にも目を向ける取組みは不可欠である。というのも、幼稚園児はすでに保護者と共に、コンビニ・スーパー店や病院、遊園地など、地域でのさまざまな生活を経験しているからである。いくつか一般的な例を列举してみよう。

- ①近隣の諸施設訪問とその活動の見学（図書館、児童館、文化センター、コミュニティセンター、スポーツセンター、消防署など）
- ②様々な地域行事（夏祭り、文化祭、その他各種イベント）への参加、協力など。
- ③近隣住民や交通安全指導員などとの関わり。
- ④銀行、郵便局、スーパー店と連携して、絵画や工作などの展示など。
- ⑤防災・防犯を含めて地域の安全に関する諸活動への参加など。
- ⑥ゴミ収集や資源ごみ回収への協力など。

そこで次に、きふね幼稚園で行った地域の諸施設訪問から代表的な二つの事例を取り上げたい。

4. 地域の諸施設訪問の事例

(1) 消防署

消防署はきふね幼稚園の近隣にある施設で、地域の安全を支える重要な機関であるから、子どもたちにとって、その見学は貴重な機会となる。また、消防署の方でも近隣との関係を大事にしており、その活動を身近に理解してほしいと望んでいて、かわいい幼稚園児たちの訪問は消防署にとっても地域に馴染み深く受け入れられる楽しいイベントとなる、と歓迎している。写真6は、5月に年長組が訪問したときの様子である。子ども用の消防服を着せてもらった子どもたちは、まったく新しい経験で大喜びである。消防署や消防自動車、消防士に少しでも関心の目を向ける子どもたちも現れるに違いない。そしてこのような子どもの様子を見た保護者にとっても、消防署はいっそう身近な存在になるだろう。こうして幼稚園児たちが地域の諸機関を訪問してイベントをおこなうことは、「まちづくり」の一角を担うことにも繋がる。

消防署としては、本当なら園庭で消火器によって火を消す作業を園児に見てほしいと希望している。園児が火を実際に見て、火の怖さや火の扱いの実際を経験することの大切さを小さいときから身につけてほしいと願っているからであり、かつては子どもの「火遊び」から火事が発生することがしばしばあったからである。ただ、園庭でのそうした作業を実現することはなかなか難しいのが現実であり、きふね幼稚園のイベントとしては消防署訪問に止まっている。



写真6 消防署訪問

(2) 高齢者福祉施設

もう一つの施設訪問として高齢者福祉施設を挙げたい。多くの幼稚園が類似の訪問をしており、地域と関わるごく普通のイベントとなっている。社会福祉法人である保育所のなかには高齢者ケア施設を併設しているものもあり、子どもと高齢者との交流が日常的に行われている場合もある。



写真7 高齢者福祉施設訪問

写真7はきふね幼稚園で9月に年中組がおこなった、近隣の高齢者福祉施設を訪問したときの様子である。いわば祖父母と孫のような触れ合いを生み出す訪問となる。もともと子どもは優しい祖父母が好きであり、祖父母も慈しみをもって子どもと接することを喜ぶ。そうした関係は、これまでの三世大家族のなかでは、ごく当たり前に見られた光景であったが、核家族形態が主流となった今日では、高齢者福祉施設での光景がごく普通になってしまった。祖父母がいても遠くに離れて住んでいるから、日常的に触れ合うことができないからである。そうした点で、幼稚園は園外イベントしてきわめて重要な場を提供しているわけである。

祖父母と孫といった異世代の触れ合いには、人間性にとってきわめて根本的な原理が隠されていることを明らかにしたのは、「ライフサイクル」を研究の核に据えた20世紀最大の人文社会学者であったエリクソンである。「ライフサイクル」は「人生周期」と訳され、個人が幼児期から老齢期にわたる一生の移り変わりを意味すると一般には理解されている。しかし、エリクソンは「サイクル」には二重の傾向があると指摘する。一つはそれ自身を完結しようとする傾向であり、もう一つはその個人が強さも弱さも、そこから受け取りまたそれに与えるところの「世代連鎖」の一環を形成しようとする傾向である⁽⁷⁾。私たちは「人生周期」が前者のみを意識し、後者を意識しない、つまり「サイクル」には「世代連鎖」の側面があることを見落としている。この見落としに気づかせてくれるのが写真7であると言えないだろうか。

人間性は、一つの世代が生まれて終焉を迎えると次の世代へと繋がっていく一連の時間の流れのなかに存在する。高齢者福祉施設での老若の触れ合いは、言ってみればその流れを実際に体験する場である。触れ合いには伝承遊びや伝統的なわらべ歌を共に歌うような活動を伴なう。そうした活動を通じて、年長者は懐かしさと共に有限である生命が少しでも無限へと踏み出すことを一瞬でも感じて、生命への安定感・安心感を覚えるに違いない。また年少者は、生命の変化の様子（有限性への気づき）を間近に見ながら、自分たちへと橋渡しする世代の連続性を少しでも感じ始めるのではないだろうか。

このように、幼稚園の行事として定着している高齢者福祉施設訪問によって、単におじいちゃんやおばあちゃんと楽しい触れ合いのひとときを過ごそう、といった表面的捉え方に止まらず、それをライフサイクルの原理を考察するきっかけにすることも、保育者養成教育には求められて

いる大切な課題である。

5. 地域環境としての幼小連携

これまで地域の諸機関・諸施設の事例をいくつか挙げてきたが、最後にどうしても触れておきたいのが小学校である。2007（平成19）年の学校教育法の改正によって、幼稚園教育が小学校以降の学校教育の基礎として明確に位置づけられて以来、「幼小連携」という言い方が頻繁に口にされてきた。文部科学省『幼稚園教育要領解説』でも、幼小連携について以下のように述べられている。

「幼稚園のみならず、小学校においても、幼稚園から①小学校への移行を円滑にすることが求められる。・・・円滑な接続のためには、②教育課程の編成や指導方法の工夫、教師同士がお互いの教育内容について相互に理解すること、③幼児と児童の交流など、幼稚園と小学校が④組織的に連携することが大切である」⁽⁸⁾（論点を強調するための①～④記号は引用者）。

とはいえ、「①小学校への移行を円滑」化することは実際には未だ不十分なまま止まっているのが現実であると言えよう。いわゆる広く使われる「小1プロブレム」という言葉がそれを物語っている。なぜ不十分なまま止まるのか、この問題を地域やイベントの課題として改めて検討すると、以下のような三つの問題点を指摘できる。

- a. 「③幼児と児童の交流」までいかなくても、入学予定の幼稚園児が事前に小学校を見学するようなイベントはすでに多くの地域でおこなわれている。ただし、その見学が「①小学校への移行を円滑」化するまでに至っているかどうか。小学校の施設は幼稚園とはまったく違う。それこそ園内「環境」との相違である。玄関に入ると大きな下駄箱があり、各教室の様子も幼稚園と比べて驚くばかりの異質さである。多くの個人机と椅子が前方に向けて一列に並び、黒板と教卓、周りに多種多様な参考書・資料の類が配置されている、など。そして、トイレや体育館、プール、図書室を見れば、別世界の施設「環境」であることが一目瞭然である。こうした施設の違いからしても、新1年生が小学校生活に適應することが大きな課題になることはすぐに分かることであり、これが「小1プロブレム」の入り口であることも容易に理解できる。したがって、1回だけの見学に止まらずに、日常的に小学校を訪問できるような工夫がなされるべきだろう。そして「③幼児と児童の交流」も日常的に実現できれば理想的である。
- b. 「②教師同士がお互いの教育内容について相互に理解」というのは、かなり進んだ両者のカリキュラム交流ではあるが、その前に園児に関する情報交流が不可欠である。たしかに、幼稚園と小学校の教師が開く情報交流懇談会は従来から各地で開催されてはいる。しかし、小学校教師の多忙化や毎年春の人事異動など、入学する園児に関して小学校と基本的な情報交流をすることすら難しい状況が生まれている。
- c. 認定こども園の誕生や、小規模保育所、無認可保育所など、伝統的な幼稚園と保育所だけでなく、幼児教育・保育機関が新たに多様化しているだけに、幼小連携だけでは、小学校

に入学する子どもたちに関する情報交流は不十分となり、「④組織的な連携」そのものが簡単に推進できなくなりつつある。

以上、一口に幼小連携と言っても、より広い幼児教育・保育をめぐる極めて大きな制度変化のなかでは「①小学校への移行を円滑」化するには、さまざまに困難な環境が現出していると言える。たしかに、子どもが過ごす場は、幼稚園・保育所・認定こども園・無認可保育所などから小学校へと移行する。しかし、そうであるなら余計に、子どもを取り巻く環境としての機関・施設に目を奪われすぎるのではなくて、あくまで子ども自身の発達過程を柱として、「①小学校への移行の円滑」を追究していくべきである。

こうして、行事と地域の視点による幼稚園教育の再検討は、最終的にこの「①小学校への移行の円滑」という重要な課題に到達するのであり、この課題に至る過程を核として保育者養成教育を捉え直すことが要請される。

【注】

- (1) 「行事」小島義郎他編『カレッジライトハウス和英辞典』初版、研究社、1995年（下線引用者）。
- (2) 川崎勝彦・今津孝次郎「秋の虫採りによる『保育内容（環境）』学習の試みー平和公園のフィールドワークからー」『東邦学誌』第46巻第1号、2017年6月。
- (3) 今津孝次郎『人生時間割の社会学』世界思想社、2008年、38～43頁。
- (4) 柴崎正行・若月芳浩編『保育内容「環境」』ミネルヴァ書房、2009年、第3章第6節。
- (5) 愛知東邦大学教育学部・サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック』第3版、2017年3月。
- (6) 一般的な多文化社会論や外国人児童生徒教育に関する研究や議論は盛んでも、「多文化保育」については、全国でそれほど多くの研究や議論がなされているわけではない。数少ない文献のうちいくつかを挙げておく。大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子『外国人の子どもの保育』萌文書林、1998年、J. ゴンザレス・メーナ『多文化共生社会の保育者』植田都・日浦直美共訳、北大路書房、2004年、山田千明編『多文化に生きる子どもたち』明石書店、2006年、今津孝次郎「多文化地域社会の保育を考える」『みどりの風』第40号、東邦学園同窓会、2016年2月、など。
- (7) 今津孝次郎『人生時間割の社会学』前出、101～102頁。
- (8) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、221～222頁。

受理日 平成30年3月27日